

関西学院大学考古学研究会の設立と

武藤誠「古墳のあるキャンパス」の紹介

福 島 好 和

1976年4月、関西学院大学考古学研究会の生みの親である武藤誠先生が定年ご退職されて以来、同研究会の顧問を受け継ぎましたが、今年をもって定年退職いたします。2003年4月、関西学院大学考古学研究会は関西学院大学文化総部の公認団体となり、ホームページも開いていますが、いささか発足当初のことが不明のようですので、退職を機に、発足以来その会員であったものとして、そのことを書き止めておきます。

関西学院大学考古学研究会は、本学文学部史学科に考古学専攻がないため、史学科のカリキュラムで開講されていた史学実習の遺跡見学などを通じて、すでに末永雅雄先生が率いる関西大学考古学研究室において調査が進められていた兵庫県川西市の加茂遺跡に、1952年6月から関関合同で発掘調査することが決定したことにはじまるといつてよいと思います。当時は本学からは武藤誠先生と歴史地理学を担当されていた渡辺久雄先生が担当することとなり、史学実習の受講者が加わって調査が開始されました。調査はその後、1958年の15次調査まで続くこととなりました。

1956年4月、文学部史学科の学生による考古学研究会が発足しました。発足当初は研究会室もなく、武藤先生の個人研究室を占拠していましたが、ようやく文学部学生自治会の傘下となり、文学部本館地下室の一角をあたえられ、本格的な活動が開始されました。発足当初、本研究会が中心に調査したのは西宮市五ヶ山弥生遺跡（1958年）・関西学院構内古墳（1959年）・芦屋市会下山遺跡の発掘調査でした。また、1959年には兵庫県家島群島総合学術調査団に加えられました。

1969年、全国的に広がった大学紛争が本学でも激しくなり、1970年によく鎮まりましたが、文学部学生自治会が瓦解し、本研究会も多大な影響を受けました。寄託されていた遺物の搬出など残留の研究会メンバーで辛うじて守りました。また、研究会活動も周辺自治体の協力で実施していました。こうしたことがきっかけで、考古学研究会は非公認ながら同好会として存続し続けたのです。

1973年3月、『関西学院考古』1号が発刊されました。大学紛争後の研究会活動の集大成的な本機関紙は、学生諸君がそれぞれ費用を持ち寄り発行した意義ある機関紙です。機関紙は断続的ではあるが今日まで続けられています。

最後になりましたが、関西学院大学考古学研究会発足の契機となった「加茂遺跡」について立派な報告書『摂津加茂』（関西大学、1968年刊）があります。しかし、関西学院構内古墳については『西宮市史』に概報が記されている程度です。したがって、本研究会の生みの親である武藤誠先生が、本学の同窓会通信No.64に記された「古墳のあるキャンパス」を探録したいと思います。

古墳のあるキャンパス

—関西学院構内古墳と私—

名誉教授 武 藤 誠

1

六甲山東麓の景勝の地、「上ヶ原」台地の名は、関西学院のキャンパスとなって以来、ひろくその名を知られるようになった。校歌「空の翼」でくり返しとなえる「上ヶ原ふるえ」の歌詞によって天下に周知されている。

ところがこの地名は、実は学院移転（昭和4年）以前から、古代史研究者の間には、古墳の分布いちじるしい地としてよく知られていたのである。このことは、古墳をはじめ考古学上の遺跡や遺物の発見が、新聞紙上に大きい活字になり、世人の関心をひくようになった今日でも、意外の感をもつ人が多いだろう。上ヶ原で何ヵ年か学んだひとたちでも、恐らく知っている人はすぐないと思う。昭和のはじめごろから住宅地開発がはじまり、多数遺存していた古墳が次第に姿を消して仕舞っているのだからそれも止むを得ないだろう。しかし、ただ一基、それも八分通り、形態・構造をよくのこしている古墳が、学院内に破壊されないで遺されているのだが、その貴重な、今日いう文化財の存在も知らない人が多い。キャンパスに、古代史研究に重要な古墳をもつている大学は、まずあるまい。昭和7年以来、学院の各学部で日本史学を講じ、しかも古代史とくに考古学を研究分野とした私は、来任以来この古墳にいろいろのかかわりをもった。その経緯のあれこれを記したい。

2

上ヶ原の古墳に関する最も古い記録は、享保20年（1735）に並河誠所が編述刊行した『五畿内志』のうちの「摂津志」で、「車塚は上ヶ原新田」（武庫郡「陵墓」の項）と記し、荒墳の一として記している。車塚とよばれる古墳は全国に多い。それは前方後円形の墳丘をもつ古墳に一般的に名付けられているので、この呼び名からこの古墳がいわゆる前方後円墳であることがわかる。その位置は安政4年（1857）の村絵図に可成り大きくえがかれているので、ほぼ推定される。どうやら学院敷地内の南部あたりらしい。若しこの前方後円墳がこわされずにいたら、上ヶ原の景観は大きく変わるものとなり、学院キャンパスも、今日のような形をとることが出来なかつたであろう。

上ヶ原の古墳が郷土史家の注意をひき、考古学者の専門研究がはじまり、学界に知られるようになるのは大正の中ごろから昭和のはじめである。大正7年に有名な喜田貞吉博士が『摂津郷土史論』に執筆され、のち『神戸市史』別録1（大正13年刊）に収められた「武庫地方上代の遺物遺蹟」という論説に

甲東村上ヶ原新田の北方、仁川南畔より山手にかけて群集墳あり、今尚二十数個存す。と記され、小林行雄氏（現在京大名誉教授）が昭和9年に発表した「技術からみた古墳の様式」（「考古学」5-6）に載った上ヶ原古墳群20基の分布図によって、群集墳の遺存例として注目されるようになった。この分布図は心理学研究室やテニス・コートのあるあたりを対象としている。

3

私が上ヶ原古墳群を知ったのは、旧制高校在学中の大正14年秋、居宅が仁川に移ったので、休暇中に仁川河畔や両岸の台地の縁辺一帯を散策するようになって以来のことである。もちろん、まだ考古学の知識もなく、歴史好きの青年の目で見るにすぎなかった。京大で日本史学を専攻するようになっても、史学理論や史料原典の勉強に忙しかったので、特に関心をもつこともなく、住宅地開発のために次第に失われて行くのを見送っていたのは、今から思えば恥ずかしい次第である。

卒業後、兵庫県の嘱託をうけ史蹟調査にたずさわるようになり、昭和7年から学院の大学予科で日本史を講義することになった。当時、神話伝承にはじまる日本古代史でなく、古代人の生活の中で生み出された道具や住居跡や墓など、有形文化遺産によって実証的に日本史の黎明期を伝えようという学風が興っていた。私はこのような学風の中で育ったので、学問を実践に移すのもつとも恵まれた職場を与えられたわけである。

当時学院には史学を専攻した教員がなかったので、私は予科だけでなく専門学校として存続していた文学部や神学部にも授業をもち、縄文土器や弥生式土器、銅劍・銅鉢・銅戈や古墳の講義をした。これらの遺物・遺跡の知識が、そのころは限られた人たちしか知られていなかつたので、学生諸君に喜ばれた。古い同窓に会うと「先生の授業で古墳の話だけはおぼえています」と云ってくれる人が多い。兵庫県の史蹟研究の任務も、引きつきやっていたので、その立場を活用して学生有志をつれて県下の代表的な古墳を見学したこともある。姫路市にある壇場山古墳へ行ったとき、当時予科生であった小寺学長も参加し、後日その思い出を語って呉れたことがある。

キャンパスの古墳は周辺の古墳が姿を消していくに従って希少価値を高めた。この古墳だけは保存したく、それにはまず学院内部の人たちによく知って貰いたいので調査記録をつくり、昭和10年11月刊行の「甲陵」（大学予科発行）に登載した。この調査には柏倉亮吉氏（当時予科の授業担当講師、現在山形大学名誉教授）が協力して下さった。また予科の児玉国之進先生と予科生加藤・川口両君の助力を得た。こうしてはじめて「学院構内古墳」が正確に世に知られるようになった。その概要は次記のとおりである。

学院敷地の西北隅、図書館裏の池（いま池を埋めて社会学部校舎があるところ）の西北方に位置し、古墳時代後期（6世紀～7世紀前半）の、横穴式石室をもつ円墳である（写真参照）。封土は径12メートル・高さ3メートル、石室は入口を南に開いた狭長な平面をもち、玄室（遺骸を安置する部分）の奥行4.74メートル、幅1.5メートル、高さ2.40メートル。側壁は上方へ、もち送って積み、幅をせばめてあり、天井部では70センチとなっている。天井石は4個の巨石

を用い、巨大な奥壁の石とともに、この形式の古墳構築の特徴を示している（表紙および左掲写真参照）。羨道（玄室へ入る通路）は破壊部分が多く、全形不明だが、東壁は玄室東壁の延長線につくり、西壁をもち出して幅を 1.20 メートルにせばめている。長さは残存部で 5 メートルを測る。高さも明確に測り難いが、玄室部との境で 1.60 メートルである。（石室の計測値は後述の再調査のデータによる）

4

戦時中、キャンパスの大部分が徵用されたが、古墳の所在地は幸いに供出をまぬがれたので旧状のまま新しい時代を迎えた。日本史とくに古代史の見方が大きく変わり、考古学の研究成果にもとづく古代史の見直しが歴史教育の主流となって、古墳をはじめ古代の文化遺産が歴史資料として重んじられるようになった。学院大学にも文学部に史学科が開設され、日本史学専攻コースが置かれ、日本考古学を研究テーマにする学生ができた。考古学研究会には多数の学生が集るようになつたので、学院古墳の再調査を行つた。たまたま西宮市史編纂事業がはじまり、私はその専門委員になつたので、市史の資料調査作業の一つとして昭和 34 年の春休みを利用して史学科学生と OB によってこの調査を実施したのである。玄室内に流入していた土砂を搬出し、床面を検出して墳の構造を明らかにすると共に、埋葬遺骸の一部や副葬品を見出し、多くの収穫を得た。副葬品は金環（銅芯金張りの耳環） 5、滑石製勾玉 1、こはく製なつめ玉 2、碧玉製くだ玉 7、水晶製切子玉 6、硝石製小玉 35 をはじめ、鉄鏃 4、馬具（革帶留金具片） 1、須恵器（埴、壺各 1）と断片若干であった。遺骸は棺が全く失われ、床面で大腿骨ほか骨片若干と歯 2 個体以上が見出された。本来家族墓の性格をもつ横穴式古墳であるから、二次、三次埋葬がおこなわれたのであろう。表紙写真に勾玉・くだ玉・小玉・なつめ玉など装身具の一部を、糸でつらねて示した。このままの形で出土したのではない。

なお市史を執筆中に、本墳の東南 30 メートルばかりのところにも古墳があり、用水池をつくったとき破壊され、その副葬品が大正 3 年に池底の掘りさらえ作業中に発見されたことが、宮内省に提出された書類によって判明した。この提出書類に村人が「百塚」と呼ぶ数多い古墳が周辺山林にあったと記してある。このことは、学院の古墳が群集墳の一つであることを証明する。古墳の築造は前期・中期には、限られた少数の権力保持者のみがなし得たが、後期の末になると、戸単位にささやかながら、今日古墳とよばれる形をそなえたものをつくるようになり、爆發的にその数を増し群を形成した。学院の古墳はその構造や副葬品から見て、古墳群のうちで一段ぬき出したものと思われる。従つて集落のうちでのもっとも有力な氏族の家の墓といえよう。

5

こうして次第に脚光を浴びるようになった学院構内古墳は、西宮市が文化財保護条例を制定して程なく、「西宮市指定文化財」に指定され（昭和 49 年 3 月）、翌 50 年には市費をもって保存の

ための金網や説明板がつくられ、旧觀一変した。末永く保存の保障がえられたことは喜ばしい。それに増して嬉しいことは去る 51 年 3 月定年退職した時、考古学研究会の学生諸君が「関西学院考古」第 3 号を「仁川流域の後期古墳研究号」として私に献呈してくれたことである。このたび本誌に美しいカラー写真を表紙に用いてこの古墳をめぐる半世紀の思い出を書きのこす機会を与えられたことも、望外の幸せである。

